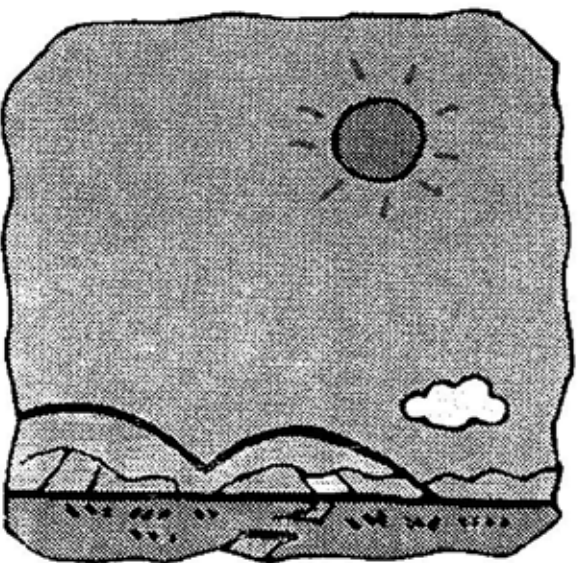




おじやんの青春日記

黒川 賢司



おじさんの青春日記

日本の活力の中心となって働いてきた、おじさん。
複雑な思いをそっと胸にしまつて、きょうもガンバルおじさん。
みなさん！おじさんにもっと拍手を送ってください。
会社では窓際といわれ、家庭では存在さえアヤフヤな、中年の
おじさんのさまざまな人生の切れ端を、
オムニバス風のショートストーリーにします。
題して「おじさんの青春日記」。

書き手 里吉 賢司

この作品は、通商産業省・中小企業大学校での講演資料、雑誌「月刊PL」（芸術生活社）への寄稿原稿ほかをまとめたものです。

おじさんの青春日記

ス
ー
パ
ー
ス
タ
ー

あれはもう十年も前のことです。

友達のごんちゃんから電話がありました。ごんちゃんというのは在日朝鮮人で、金融会社を経営しています。金融といってもデーンとした銀行なんかではなく、世間一般では「高利貸し」と呼ばれている人です。動かすお金は十億とも二十億とも。名前を出せばみんなが知っている企業のエライ人が、こっそり裏口からお金を借りにくるのだそうです。

「ねえ、矢沢永吉いうて知つとる？」

「知らん。何や、それ？」

「テレビなんかじゃ出んらしいけど、なんでも若いモンにはえらい人気があつて、スーパースター言われとるらしい。あいつ、ワシの同級生なんよ」

「へエー。それで？」

「あした体育館であいつのコンサートがあるらしいんよ。ワシ、音楽さっぱり苦手じゃけど、何十年ぶりにあいつに会うてみたい。一人で行くのテレくさいし、あんた、あしたヒマ？」

翌日、二人は夕暮れの体育館の前で、会場を取り巻く長蛇の列をしばらく茫然と眺めていました。

ごんちゃんは広島生まれの広島育ち。中学校で矢沢永吉さんと大の仲良しで、毎日のように暗くなるまで二人で野山を駆けまわった仲だそうです。

「えらいもんじゃ。この人たち、みんな金払つてあいつの歌聴きにきとるんじやろうか？ワシが訪ねていったら、あいつびつくりするじやるのお。あつ、ワシ、うっかりして花束なんか持つてくるの忘れとつた。まんじゅうでも買つてこうか？」

「ええよ、ええよ。ごんちゃんが訪ねてきてくれただけで、永ちゃん喜ぶよ」

「何しろ、コンサートとかいうもん、いっぺんも行ったことないけ。マナーいうもんがわからん。まつ、あんたにあとから永ちゃん紹介するけつ」

ごんちゃんは少しく興奮の面持ちで、新調のスーツの背をなびかせて、颯爽と楽屋口に向かいました。

思いがけず早く楽屋口から出てきたごんちゃんは、いつになく思いつめたような顔をして私に言いました。

「飲みにいこ。飲みにいこ」

「どうしたんや。どうじゃつた？」

「あいつ、ワシにや会いとつない言つとるらしい。昔の友達にや会いとつないんじやと」

「ごんちゃんのこと、忘れとるんか」

「いいや、しっかり覚えとるけど今日は会いとつない、言つとるいうて、取り巻きが申し訳なさそうにワシにそう言つた」

ステージから響いてくるバンドの音を背に、二人は言葉少なに夜の街へ歩きました。

酒場のカウンターで、ごんちゃんはテレ笑いを浮かべて水割りの氷と遊びました。

「ワシは別にあいつにせ二たかろうとか、メシ食わせ、言つつもりで行つたんじやない。わかるじやろ？」

「わかつとるよ、そんなこと。誰もそんなこと思わんよ」

「ただ、あいつと遊んどつた昔のことが懐かしゆうて。ワシの友達があんなに有名になつたことが、ワシはほんまに自分のことのように嬉しかつただけなんじや」

すっかりしおれてしまったごんちゃんを慰める言葉が、私には容易にみつきりませんでした。

「ワシは朝鮮人じゃけ、小さい頃からずいぶんくやしい目にも合うてきた。親は原爆におうて体は弱いし、家もほんまに貧乏じゃった。まあ、あの頃は終戦のすぐ後で、日本全体が貧しかったんじゃけどね」

ふだん全くお酒を飲まないごんちゃんは、水割りを何杯もおかわりをしながら視線を宙に浮かせて話し続けました。

「じゃけど、あいつの家はワシなんかより、もっとひどい貧乏しとったんじゃ。犬小屋みたいな家におばあさんと二人で住んどった。そりゃあ、貧乏なワシでも同情するほどじゃった。でもあいつとは何でか知らんけどウマが合うて、いつも二人一緒じゃった。あいつが喧嘩でやられたらワシが助けに行く。ワシがいじめられたらあいつがワシの盾になってくれる。まあ、二人は連合軍じゃったわけよ」

ごんちゃんがその夜初めて、楽しそうに笑いました。

「ワシにとつては懐かしい思い出も、あいつにとつては触れられとうない、つらい思い出じゃったんかも知れんのお。もうあいつに会うことは二度とないじゃろう。あいつはあいつの世界でビッグになりやあええし、ワシはワシで精一杯やるしかないよね」

その夜ごんちゃんは、永ちゃんを夜の街に招待しようとする用意していた、びっくりするほどの大金を、私と二人で一夜で使いきってしまいました。

ごんちゃんと永ちゃんが青春を過ごした町は、原爆の爆心地からわずか二キロのところ。その町のすぐそばに、今も、時のうつりがなかったようにゆったりと川が流れ、モダンに整備された河畔の夾竹桃が秋の風に揺れています。

了

おじさんの青春日記

岡ちゃんに捧げる詩

岡ちゃんは一滴もお酒が飲めません。それなのに、毎晩のようにどこかの酒場で「北国の春」を歌う岡ちゃんの姿を見ることができません。くたびれた皮のトランク、よれよれのレインコートを盛り場の要所要所に隠して、接待のお客さんを前に千昌夫の扮装で「北国の春」を歌うのです。

岡ちゃんの仕事は、大型クレーンメーカーの営業マン。潮風に鍛えられて赤銅色に日焼けした世界中の海の男たちが、岡ちゃんの大切なお客さまです。

その昔、大阪のお得意先に納めたクレーンが故障して、現地に部品がなくて困っている話を聞いた岡ちゃんは、その足で上司の許可もとらず、三百キロの深夜の道のりを部品を抱えてタクシーをぶっ飛ばしました。

あとで上役にはこっぴどく叱られたそうですが、修理が済んで、機械が動き始めた時のお客さんの笑顔を見るのは、そりゃあ、たまらなく嬉しいものだそうです。

「困ったときは会議をせず、まずお客さんのところへ行く」ことが岡ちゃんのモットーなのです。もとより、上司の顔をうかがって出世してやるうなどという気は、岡ちゃんにはこれっぽっちもありません。

瞬時の判断が必要な非常の時、マニュアルにない事件の対応で皆が頭を抱えている時、真っ先に体が動くのが岡ちゃんです。

大阪の件以来、岡ちゃんの深夜の長旅のお供をしたカープタクシーの運転手さんのあいだで、岡ちゃんの心意気は大評判です。

岡ちゃんを頼って世界中から訪ねてくるお客さんは、岡ちゃんが同乗するタクシーのなかの春風のような心地よさに異国の疲れを忘れまます。

タクシーを呼ぶ暗号は、カラオケの曲番からつけた「屁（へ）の五番」。百三十台ものカープタクシーが、岡ちゃんの声と「への五番」の合言葉を聞き分け、どこへでも最優先で駆けつけます。

太平洋戦争開戦の年、生まれたばかりの岡ちゃんは、翌年、お父さんを戦争で失いました。もちろん、お父さんの顔は覚えていません。

陸軍伍長としてフィリピン、台湾を転戦のち戦死したお父さんの死因、「マラリアによる肺炎」が遺族年金の支給条件に該当しないという理由だけで、厚生省は戦後も遺族年金の支給を拒否し続けたそうです。

戦争犠牲者をなおも峻別しようとした国の冷たさを、岡ちゃんはいまも憤っています。

昭和一九年、一家はお母さんの里に疎開。当時五才だったお兄さんと、乳呑み児だった岡ちゃんを、お母さんは和裁と洋裁の内職で育てあげました。

三日間徹夜で内職のミシンを踏み続け、指先を縫い針で縫ったまま悲鳴とともに気を失ったお母さんの姿を、岡ちゃんは一生忘れないといいます。

お母さんの生命ともいうべきミシンが、質屋のノレンに消えていったこともあります。

奨学金を得て高校を卒業した岡ちゃんは、念願の大企業、三菱重工広島造船所へ入社しました。

入社といっても日給制の臨時工員扱いです。体を動かしてお金をもらえる喜びを、岡ちゃんはこの時初めて体験しました。

就職したのちも夜学で製図の勉強を続けた岡ちゃんは、十三年間の工場勤めのうち、念願の機械営業部に転属になりました。三菱重工が海から陸の構造物へと、経営の重点を変えつつある時代でもありました。

工場の送別会の時に現場のみんなにはなむけに貰った紺のブレザー、バーバリーが岡ちゃんの一生涯の宝物です。

阪神大地震の時ほど岡ちゃんが青くなつたことはありません。

今度はタクシーで、という訳にいきません。瀬戸内海を小舟を乗り継いで神戸港の岸壁に

立った岡ちゃんは、ことごとく倒壊したクレーンの群れを見て言葉もありませんでした。それは『わが子の屍（しかばね）を見るような思い』でした。

着のみのまま、テントに寝泊りしてクレーンの修理にあたっていた時の岡ちゃんの姿は、それはまるで幽霊のようでした。

灯りの消えた神戸の町。ボランティアの青年からもらったおにぎりは、噛むごとに涙がこみあげてきて、手のなかでグシャグシャになりました。

倒壊した神戸の街は敗戦直後の日本の街そのままでした。貧しかった頃、家族で分けあつて食べたおにぎりのことを岡ちゃんは思い出しました。みんなが明日を生きることには精一杯でした。

生涯をクレーンの仕事にかけ、世界じゅうにクレーンを売り歩いて、外貨を稼いできたという誇りが岡ちゃんにはあります。

小麦や鉄鉱石を港で積み降ろすクレーンの勇姿は、岡ちゃんの生きがいです。名も無いタクシーの運転手たちや、蟻のように働くクレーン工場の工員たちが、自分の売るクレーンを橋脚のように支えてくれています。

ボランティアの青年の屈託のない笑顔のなかに、昔とは比べようもなく豊かになった日本を見たようでした。自分も少しだけこの豊かさを支えてきたのだと、岡ちゃんは思いました。

来年の春、岡ちゃんは停年退職の日を迎えます。

その時は東北の故郷に帰って、思い切り「北国の春」を歌おうと、岡ちゃんは考えています。

了

おじさんの青春日記

ものを造るとこにうんと

「拝啓。私は長崎の田舎で理髪店を営んでおります。永年使い馴れた御社製の電気バリカンがこのところ調子が悪く、一度見て頂きたいと思ってお送りしました。ぜひぶん前に購入した製品ですので、修理も不能と思えます。もし、現在も電気バリカンを製造しておられましたら、御社の同じ型の製品を購入させてもらいたく、よろしくお願い申し上げます。」

「ご郵送いただきました電気バリカンとお手紙を拝見いたしました。製品に打刻してある製造番号を見て驚きました。昭和二十一年製の製品です。私が生まれるよりも前、日本敗戦の翌年に造られた製品です。五十年の長きにわたって私どもの製品をご愛用いただき、心よりお礼申し上げます。アルミニウム製のケースが永年のご愛用で指の形にすり減っております。物を造る者にとりまして、これほどの冥利を味わうことはございません。当社創業者であります私の父もすでに三十五年ほど前に亡くなり、長髪の流行など世の風俗の変遷には克てず、私の決断によって十五年前に電気バリカンの製造を廃止いたしました。電気バリカン発祥の地として栄え、最盛期には十社近くあった広島県の電気バリカンメーカーも、今では一社が辛うじて残るだけとなりました。お送り頂きました電気バリカンを分解し内部を詳細に検査いたしました。当社は現在、食品機械ほかを製造しており、電気バリカンの修理が出来るのは今では社長の私だけとなりました。電気バリカン廃業を決断した際、最小限の部品は各少量づつ保存しておりますので、今後私健在である限り、電気バリカン修理のご要望におこたえしたいと考えております。」

修理のすんだ電気バリカンに私からの書簡を添えた小包みを発送してしばらくのち、再び長崎から手紙が届いた。

「新品が送られてきたとばかり思い開封いたしました。思いもかけず修理の終わった電気バリカンが返送され、とてもうれしく感謝しております。」

職人にとって長年使い馴れた道具というのは、手にもなじみ、なかなか手離しがたく愛着を感じるのです。まだまだ使用に耐えるとのこと。ありがたいことです。修理代金は無用との有り難いお申し出を頂戴いたしました。代金にかえて些少なからお菓子代を同封させていただきました。社員の皆さまにお茶菓子でもお配りいただければ幸甚の至りです。」

この、長崎からの手紙が届く二十五年前のこと。

大学卒業を目前にして進路に迷っていた私は、父の代からのお得意先である大阪の理容器具商社のH社長を訪問した。

その十年前の父の葬儀の際、棺のなかに眠る父にむかつて、語りかけるような弔辞をくささつたその社長は、進路を決めかねる私を鋭い視線で見据えて、「父親の代から世のなかに製品を供給した責任はだれが受け継ぐんや？物を造る事業というんは、ワシらのように商品を仕入れて右から左へ卸し売りするような商売とはわけが違うんや。それだけに苦労も多いやろし、また誇り高い事業でもあるんや。製品の保守や修理、物を造る者には忘れちゃあかん責任、ちゅうもんがあるんや。それを回避しちゃうあかん。出来る限りの応援はするさかい、オヤジの事業を継いで、全力を尽くしてやってみてくれんか。」

と真剣な眼差しで私を諭された。

すでに深刻な斜陽期に入っていた電気バリカンの製造事業だったが、この社長の言葉をよりどころに私の長い長い模索が始まった。

父の代から九州はお得意先が抜きん出て多い地域だった。幼い頃、強いなまりの九州弁を話す客がしじゅう父のもとを訪れた。宿も満足に無い時代。遠来の客は自宅に泊まり込んで、父と枕を並べて深夜まで仕事の話にふけた。

そのような客からだろうか、四斗缶に詰め込んだ生きた伊勢エビや、羽毛のついたままの雉子（きじ）がはるばる鉄道便で送られてくることがあった。

父の工場で造る電気バリカンを愛用して下さる零細な理容院や理容器具店のお陰で、私たち家族はその日の糧（かて）を得ることができ、姉弟は十分な教育を受けさせてもらった。

「九州へ足を向けて寝ちゃあいけん」

九州への愛着と感謝をこめて語っていた父の言葉を思い出す。

福岡、佐賀、熊本。私は大学生の頃から電車を乗り継いで九州全土に散らばる理容器具店をセールスにまわった。理容器具店はこの地方では「道具屋さん」と呼ばれ、櫛（くし）やハサミ、シャンプー、バリカンなどを一軒一軒散髪屋さんに納めて回るつましい商売である。

鏡に向かうお客さんと愛想よく話こんでいた散髪屋の主（あるじ）は、待合椅子の片隅で小さくなって待つ道具屋さんには急に無愛想になって、ぶつきらばうに細かな注文を言い渡すのである。

店を訪ねるとその店主はたいい留守で、しっかり者の奥さんがいそいそと店番をしている。

「ご主人おられますか？」

「さあ、さつきまでその辺チヨロチヨロしとんしゃったが。また、一杯ひっかけとるん

ぢやないとね？ まだお天道さまも高いとに。ちよつとあんた悪かばってん、そのあたりの店ばさがしてみてくれんやろか？」

近くの飲食店で店主を探しあてると、昼間から焼酎を飲んで赤い顔をしている。

無理に勧められて焼酎を呑みながらの商談が始まる。

「戦争がすんで世のながが落ち着き始めた頃が、そりやあ、一番よか時代じゃったと。三度のメシが食えるようになったら人間次は外見ばい。散髪屋が次々ん開店して、何千円もする電気バリカンが月に二十も三十も売れよったとよ。」

ばってん、こんごろは、なんちゅうても若い男が、女ば出入りするパーマ屋へ行く時代ばい。バリカンで刈るつちゅうたら、頭かかえて逃げていきよるばい。ビートルズいうかね？ 髪ん毛ば女んことなごうして、ギターかかえてテケテケテケッばい。九州男児も終わリやねえ」

半日がかりの商談で半年溜まった売掛金を受け取ると、店主が次の注文書を書いてくれる。支払いは次の盆か正月である。いつまで経っても売掛金がゼロになることはない。その頃の九州での商習慣であった。

注文の数は訪問するたびに少なくなっていた。

見渡す限りの九州平野。夕暮れののどかな畑のなかを単線の電車が行く。回収した売掛金の入ったカバンをしっかりと抱いた私は、行商がえりのおばさん達の声高な九州弁を間近に聞きながら、単調な電車の揺れにまかせて車窓にもたれた。将来への不安すらも、持ちあわせていなかった。

父親がそうであったように、私の事業は何度も商品を変えた。しかし、変わらなかつたことは、一貫して製品を開発し、自社の責任において物を造り、世に送り出すという作業だった。

思いのたけを小さなネジ一本にまで託し、丹念に梱包されて初めて工場から出ていく自社の製品は、何ヶ月も何年も迷い迷ったあげく、やっと、したたり落ちた清冽な滴（しずく）のように思え、いとおしささえ感じる。

「お客さんに気に入ってもらえよ。可愛がってもらえよ」。
数えきれない失望をほんのわずかな成功の醍醐味に救われながら思いを続け、工場を出ていくトラックの後姿に声をかけ続けて、いつの間にか私も大学生の息子をもつほどに歳を重ねた。

長崎から届いた五十年前の電気バリカンは、H社長のあの時の言葉をまざまざと思い起させた。コマ送りの写真フィルムのように多くの人とのお会いや、過去の情景が私の脳裏をよぎっていった。物造りの深遠にあらためて触れる思いだった。

H社長は理容器具商として死の直前まで商売の最前線で陣頭指揮をとられ、昨年、故人となられた。

了